

会長 阿部信一
TEL 025-273-1572

事務局 井村健一
新潟市北区すみれ野2-10-12
TEL 025-259-7152

会報・編集委員会代表
浅野巨寛
長岡市金町2-2-17
TEL 0258-52-3998

新山協ニュース

新潟県山岳協会ホームページ <http://www.echigo.ne.jp/~nma/>

新潟県山岳協会顧問 藤井 信氏の逝去を悼み



藤井 信さんを偲んで

新潟県山岳協会会長 阿部 信一（新潟山岳協会会長）

室賀輝男元新潟県山岳協会
会長のご逝去から、半年も経
たない1月11日藤井信先生の
悲しい知らせを聞くこととな
りました。室賀さんといかに
強い絆で結ばれていたのか想
像に難くありません。協会の
会長職の引継ぎもそうです
し、若いときから真のザイル
もありません。私自信も多岐

にわたり大変お世話になりました。特に中国青海省遠征登山は大きな思い出であります。藤井さんが遠征隊長で私が登攀隊長をまかされました。

1997年（平成9年）中国を源流としミヤンマー、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナム、6ヶ国を延々4400キロ流れる国際大河、欄滄江（メコン川）源頭に聳える青海省雜多県の曲阿加吉瑪峰（チアジャジマホウ）5930m登山がその計画でした。地図の空白地と呼ばれている、中国青海省さえ資料をもたないまったく未知な神秘的な山でした。目の前に立ちふさがる数々の困難を前になんとかII峰（5890m）を世界初登頂しベースキャンプで出迎えてくれた藤井さんのくしゃくしゃに喜ぶ顔が今も鮮明に脳に浮かび、忘れることができません。本当に藤井さんの執念、情熱が登らせてもらったといまでも、感謝に耐えません。其の7年後2004年（平成16年）本峰5930mに再度アタック、岸壁の中、3泊4日のビバークで何とか初登頂をはたせて、藤井さんに御恩を返せたおもいでありました。

そのときは藤井さんはいけなかったのですが本当に喜んでいただきました。藤井さんとパッションをいただきました。藤井さん室賀さん達のつけて頂いた貴重な中国登山協会との交流の道が途絶えることなく続けていきたいものです。

晩年肺の不調であればほど行動的であった藤井さんが、動きを制限され、思うようできなかったことがどれほど悔しかったと慙愧の思いでいっぱいです。

あの山への熱い情熱もまた山岳協会へも同じ温度で伝わっています。熱い熱い情熱が消えることなく続いていくことを信じています。

ほんとうにお疲れ様でした。そしてありがとうございます。合掌

藤井 信先輩を偲んで

新潟県山岳協会
山岳協会顧問

橋本 正巳(高田ハイキング)

2014年1月11日、雪の降りしきる寒い一日の始まりでした。

大きな時代が終わったと言いたい。思いが拭えませんが。

玄関先には雪が40〜50cmほど積り、車庫前の除雪も一段落、ホッとしていた時、藤井先生ご逝去の訃報が入りました。もはや2度と警咳に接すること叶わず、誠に痛恨の極みであります。昨年よりご体調も思わしくないと聞き、いたして、一喜一憂していた矢先の事であり、この日を迎えることは少なからず覚悟はしていたものの突然の事であり、只々驚き、ご冥福をお祈りする事しか出来ません。享年83歳の生涯を山に掛けた熱き思いを、今更ながら思い出しているところです。しかも昨年の7月には室賀日本山岳協会名誉会員もお亡くなりになったばかりだと言ったのに。巨星墜つるが如き両先輩のご逝去は大きな衝撃で言葉にならず、あらためて、一つの大

きな時代が終わったと言いたい。思いが拭えませんが。藤井先生は真摯なお人柄に加え、チャレンジ精神とそのバイタリテイは常に私共後輩の道標で有りました。長岡工業高校在任中は山岳部の指導育成に尽力され、また長岡ハイキングクラブの牽引者としての存在は計り知れないものでした。私も高田ハイキングクラブの名前の由来も、将来長岡ハイキングクラブのよくな山岳会に為りたいと言う願いを込めて命名したものです。新潟県山岳協会会長を務められた後は顧問として、また日本山岳会の永年会員として越後支部名誉会員としてのご指導は私たち後輩の力の源であり、爾来折に触れ故室賀、藤井両先輩を目標とし研鑽して参りました。藤井先生が新潟県山岳協会会長を務められておられたときは副会長のご下命を頂き、その元で

多々ご指導いただきましたこととは未だ忘れる事は出来ません。新潟県山岳協会の活性化について、国民体育大会への取り組み、またクライミング競技には早くから注目され、その対応の早さは正に先見の明とその造詣の深さを窺い知るものでありました。その他数々の業績について語り尽くすこと叶いませんが、新潟県山岳協会会長並びに日本山岳会越後支部名誉会員として比類なきご指導のもと、1992年11月16日中国青海省登山協会との兄弟協定を締結されました。遡ること5か月前の6月には中国青海省、崑崙山脈のケイコウシヤン峰(5334m)に新潟県山岳協会と青海省登山協会の合同登山隊で登頂。1993年、中国青海省共和県の青海南山(4472m)は第1回高校生訪中交流登山の引率で。1994年、中国青海省の野牛山(4898.3m)は経済不況の中、生徒の参加希望者2名で実施が危ぶまれる中、藤井先生と当時の柏崎工業高校登山部顧問の小杉克彦先生の努力

と御尽力で実施されたと聞いております。1997年、曲阿加吉瑪峰Ⅱ峰(5890m)は新潟県山岳協会50周年の記念行事の一環として企画され、登山隊長として。2000年、托木爾堤峰(4888m)は藤井先生が新疆ウイグル自治区を旅行中に、哈密市郊外より北東190kmに位置する托木爾堤峰を紹介され、それが起因とお聞きしております。この時の総隊長が元日本山岳協会会長の坂口三郎氏、副総隊長が故室賀輝男氏、隊長が藤井先生で有りました。2002年、ガンシカ峰(5425m)は新潟県山岳協会と中国青海省登山協会との兄弟友好協会締結10周年記念行事の一環として総隊長として参加されておられます。2004年、曲阿加吉瑪峰Ⅰ峰(5930m)は当時の空白部であり、その為故小倉厚氏(日本山岳会No.5709)、藤井先生の両氏が偵察山行に入って居られます。中国青海省との友好交流の過程の中で青海省の青海信越山荘

建設事業にも携わり、その時の発起人、勝野順先生、伊沢利幸先生、と精力的に活動されておられました。藤井先生が多く残された業績の中から青海信越山荘建設の経緯と顛末について発起人の御一人で居られる勝野順先生から頂いた全文をそのままご紹介させて頂きたいと思っております。この青海信越山荘については「長野県山岳協会創立50周年記念誌」の77ページに6行を割いて掲載されております。以下、勝野先生の記述全文です。「青海省に山小屋を作ろうという話は、1998年から信濃高等学校教職員山岳会(以下信高山岳会)が主催してきた「高校生訪中登山交流会」の第3回隊(1991年達理加山)第4回隊(1992年野牛山)を青海省登山協会のご協力で実施した中で始まりました。そして91年、92年の2回にわたる青海省登山協会の訪日団との協議で具体化。93年7月、有志15名が集まって「青海信州山荘をつくる会」を発足させ、同8月に



青海省 信越山荘



青海省にて

は杉山昭久以下4名で建設地を探る「青海省山岳視察団」を派遣しました。その秋にはかつて親交のあった当時新潟県山岳協会副会長の藤井信先生も賛同されて共に進めることとなり、名称を「青海信越山荘をつくる会」としたのです。翌94年2月、藤井信、伊沢利幸、勝野順の3名が青海省西寧市に於いて青海省登山協会秘書、長延義氏との間で「青海信越山荘建設契約書」を交わしました。

藤井先生は7月26日から

の新潟県高校生訪中隊長として忙しい最中の訪中で、その外交的かつ情熱的な取り組み方には全く脱帽でした。翌1995年4月27日～5月9日には「青海信越山荘完成記念ツアー」を組んで会員30人が参加、29日には山荘前で除幕式を行いました。また5月2日には青海湖西方に連なる青海南山の一峰に登ったのですが、協会員が「ここは無名峰です」と言うので、藤井さんの発案で「青海信越峰」と命名、地形図に記入すると言う話でしたが未確認です。標高も未確認ですが、3900m前後でしょう。しかし、広大な青海湖と山荘の一角を一望できる絶好の展望台で、

ゆっくり登って2～3時間のハイキングコースです。その後は清蔵公路・敦煌トレッキングから湖周騎馬トレッキング等、「青海信越山荘」を利用したツアーから個人的な旅行まで数多く実施されました。藤井信先生が「青海信越山荘」に関わられた実績は、中国登山協会なかずく青海省登山協会との数多い友好事業の一端かもしれません、間違いなく日中友好の一時期を画したものであります。次はその時の信濃毎日新聞1994年3月5日付の記事です。

「長野・新潟の高校教師ら中国に友好の山小屋 青海省登山協会と建設契約」

中国青海省に山小屋を建設しようとして訪中していた長野、新潟両県の高校教師らの「青海信越山荘をつくる会」が4日までに、同省登山協会と山小屋建設の正式契約を結んだ。建設地は西寧市の西約150キロの高原と決まり、今月中に工事を始め、来春からの利用を目指す。西寧市での調印には、県山岳協会副会長で

梓川高教諭の勝野順さんら会員3人と同省副省長らが出席。日本側が建設費の1千万円を拠出、不足分を同省登山協会が補う。会員や家族、友人5人までは無料で山荘に滞在できる。完成後の不動産権、使用权は同省登山協会が所有する等を約束した。同省政府も力添えすると挨拶した。勝野さんによると、山荘の名称は「青海信越山荘」。建設予定地は穂高連峰に匹敵する標高3195mで、冬は全面氷結する青海湖のほとりにある。周辺では放牧や菜種栽培が盛んだ。敷地は約0.3ヘクタール、煉瓦づくり2階建て延べ約400平方メートルの中国様式（約40人収容）にする。山荘を拠点に、5000m級の登山、トレッキング、パラグライダー、サイクリングやチベット自治区に通じる道路のドライプ、黄河原流域の探検などを予定している。県山協

等の高中生訪中登山交流事業に参加した勝野さんらが昨年7月つくる会を設立し、準備を進めてきた。会員はこれまでに約50人（グループ会員を含む）、建設資金は400万円集まった。引き続き一口10万円を募る。その後の青海信越山荘は中国側の事情により消滅したとの事でありませぬ。昨年の7月25日高頭祭も無事終わり、翌26日、日本山岳協会会長神崎忠男氏と八木原 啓明副会長を高頭仁兵衛翁の墓前にご案内する前に藤井先生宅を訪れました。その時は大変喜ばれ、嬉しそうにお話をされておられた顔が目につかびます。藤井先生には良く飲ませて頂きました。県山協会議の帰路の新潟から長岡の間で。新潟へ移られた後、ご自宅の近くの居酒屋で。またご自宅の囲炉裏を囲んで痛飲し、挙句の果て隣室の座敷に布団を敷いて頂いて泊まりました、2階のベッドでも泊まらせて頂いたりも致しました。何時だったかご自宅に寄ったとき、「俺にはもう不要だから」と言われ、山スキー、スキー一式を頂きました。新品同様で藤井先輩の技術の高さを窺い知るに足るものであり

ます。藤井先生の形見と思
い、今も愛用いたしております。
今思うに所属山岳会が異
なるにも関わらず大変可愛
がっていたことに、心
から感謝いたしております。

2014年2月22日「ホテ
ルニューオータニ長岡」に於
いて長岡ハイキングクラブ主
催の「室賀輝男さん・藤井信
さんを偲んで」の会が行われ
ました。室賀・藤井ご両家
ご遺族の皆様をはじめ、新潟

県山岳協会、日本山岳会越後
支部、長岡工業高等学校、山
本元帥景仰会、ボーイスカウ
ト、の各界から所縁のある大
勢の皆様が参加され、しめや
かに行われました。

流水落花、変転定めなき世
とは申しながら、在りし日の
藤井先生を偲び心からの哀惜
を申し上げ、謹んでご冥福を
お祈り申し上げます。

合掌

藤井さん あなたまでも

新潟県山岳協会参与 土田 幸雄(長岡ハイキングクラブ)

藤井さん、室賀さんが逝か
れてまだ気持ち癒えないの
に、あなたまでも逝ってしま
うなんて。どうしてそんなに
急いのですか。

昨年11月6日「室賀さんを
偲ぶ会」と「追悼集」のこと
でお伺いした時、いつもの車
椅子でしたが、色々なお話で
あつという間に時間が過ぎ、
追悼集には前々から書きたい
と思っていることが二つある

ので何とか間に合わせると元
気な様子でした。

そのとき、「首の後ろに鉄
板が入っているような感じで
痛くてしょうがないので明後
日病院を予約した」とのこと。

病院から帰られて「土田さ
ん、帯状疱疹だそうで治るに
は3週間くらいかかると言わ
れたが、原稿はなんとか書く
つもりだから」と電話があ
り、「まだ時間は十分あるの

で体調が良くなつてからで良
いですから。ところで帯状疱
疹というのは腹の周りに出て
痒いものではないのですか。」
などと話し合い元気な声だっ
たのに、まさかこんな事にな
るなんて夢々思いませんでし
た。

1月11日、偲ぶ会案内状の
作成が終わったところに電
話、一瞬「本当か」、「どうし
てこんなことに」と思考が停
止しました。

「室賀さんを偲ぶ会」は藤
井さんが代表発起人として仕
切ることで準備を進めて来た
のに。また、追悼集の「発刊
に寄せて」も当然藤井さんの
役割で、これは11月6日に下
書きを頂いてきましたが、そ
れが絶筆となるとは、断腸の
思いであります。こんなこと
があつていいのだろうか。諦
めるにも諦めきれません。

藤井さんと知りあつたのは
私が長岡ハイキングクラブに
入会した昭和32年です。長岡
工業高校教員で山岳部顧問と
いう立場もあつてか、一家言
を持つたなかなか厳しい一面
もあり、行動力抜群の人とい

うのが第一印象でした。
いつだったか、何かの行事
があつて藤井さんと二人で栃
尾鉄道(昭和50年廃止)の長
岡駅で参加者を待っていたと
き、通学の高校生が何人かで
タバコを吸っていたのを見
て、藤井さんが「君たち、見
えないところに行けや」と注
意したことがありました。普
通ならきつく叱るところです
が「なるほど生きた教育だな」
と感心しました。

晩年は焼酎一辺倒になられ
たが酒が強く、いつも夕食の
晩酌が楽しみだと言つておら
れたことが昨日のようです。
ユーモラスな一面もお持ち
で、ずーっと若い時はホーキ
を手に「坊主なりやこそ庭掃
きまする」と歌いながらの軽
妙な踊りはやんやの喝采、宴
席を沸かしたことも遠い思い
出となつてしまいました。淋
しい限りであります。

昭和63年、弟のようにして
いた徳長正さんが亡くなった
時、弔辞を読みながら万感胸
に迫つて号泣されたこと、思
わずもろい泣き……、人情家
でもありました。

昨年7月室賀さんのお通夜の
時、体調を崩しておられ、と
ても無理だとのことでした
が、ご子息の励ましで参列さ
れ友人代表での指名焼香をさ
れました。最後の対面のと
き、「兄のような室賀さん
のお別れだから最後は自分の
力で」とご子息の介添えなし
のお別れでした。お清めにも
顔を出され、その時が藤井さ
んとは最後だった岳友も多
かつたかもしれませぬ。虫が
知らせたということだったの
でしょうか。

「室賀さんを偲ぶ会」を急
ぎよ「室賀さん・藤井さん
を偲ぶ会」に変更しました
が、徳長正さんの奥さんがご
芳志に添えて「室賀さんと藤
井さんが、徳さんやあーおれ
達も来たよー、と天国でパブ
ニューギニアの話をしている
ような気がします」とあり、
身につまされる思いととも
に、残された者の心は癒され
なくても、逝った人達は天国
という世界で一緒になってい
るんだなど、一面安らぐ思い
もしました。

藤井さんとの山行では色々

な思ひ出があります。

昭和30年代に厳冬の越後三山初縦走を目指して、越後、関東の職域、一般山岳会、大雪山山岳部等が果敢に挑戦したが、豪雪に阻まれなかなか達成できないでいました。

長岡ハイキングクラブでも昭和34年暮れの厳冬期から毎年挑戦しましたが、4度目の昭和37年暮れからの厳冬期に、駒ヶ岳から中ノ岳、八海山を経てのルートで念願の初縦走に成功しました。その前年、昭和36年暮れから藤井C Lの下4人で八海山からの逆コースで挑み、4日目の12月31日は八ツ峰大日岳に登ったところで日が暮れ、幸い風もなかったことと、大日岳の頭が積雪に覆われ、かろうじて天幕一張のスペースがあったことから、藤井C Lの決断で張り綱は使用できないものの工夫して設営、幕営しました。星空の下、さんざめく麓山口の2年参りの様子やら、トイレの時は全員が起き落ちないようにならざるをえながら小用を足したことで、八ツ峰の岩峰にハーケンを打ち込むときの

厳しい藤井さんの表情などが目に浮かびます。

そして、翌朝不注意でナイロンザイルを水無溪谷に流してしまったため縦走を断念し、駒ヶ岳のサポート隊へのトランシーバーが通じなかったので、大湯温泉駐在所に連絡方依頼して帰宅しました。その夜藤井さん宅に「連絡がつかないので皆さんの責任で対応してくれ」と駐在所から電話が入り、村田栄身さんと2人ですぐ出発、その夜から翌朝にかけて一睡もせず、ドカ雪の中小倉尾根を小倉山までラッセルした強い責任感と強靱な精神力、常人にはなし得ないことであります。

昭和39年暮れ、藤井C L、本間宏之さん、土田の3人パーティで厳冬期荒沢岳初登頂を目指しました。12月28日伝之助小屋泊まり、翌12月29日前嶺下で幕営、翌々12月30日初登頂に成功しました。前嶺はじめ厳しい尾根とはうって変わって山頂はなだらかな雪面、山頂手前、コンテニユアンスでトップの藤井さんが

「肩を組んで山頂を踏もう」と3人揃ったの初登頂でした。この気配り、そしてこのような行動が自然に出てくる心優しさも併せ持ったところが、みんなに慕われた藤井さ

藤井さん 再見。

新潟県山岳協会参与

片桐 一夫(長岡ハイキングクラブ)

平成26年1月11日、闘病生活を送られていた藤井さんが逝かれてしまった。83年の生涯が終わってしまった。

昭和36年4月、私は長岡工業高校に入学し、山岳部に入社してもらい、顧問だった藤井先生からご指導を受け始め、53年間、半世紀を超えてのご指導を受けた。最初は5月に新入部員の歓迎キャンプ。長岡市の「柳市の池」(現在は県民憩いの森)だった。

まず、校舎から長岡駅まで一列縦隊行軍が始まり、そこから今はなくなった『栃尾鉄道』に乗って、悠久山駅まで行き、いよいよ目的地の柳市

の人間性のしからむところでありましょう。藤井さん、有難うございました。安らかな眠りを祈念しております。

の池まで登山が始まる。当時の山岳部長だった山岸さんに指示され、20kg超の大型テントを背負うように言われ、弱小私にはそれは『しごき』だった。今では考えられない長い距離の登山だったが、当時はそれが当たり前で、しかも夜になると長岡工業高校OBの皆さんが続々参加されてきた。当時の「大光相互銀行」で、すでに役員だった大先輩の室賀さんも夜から参加されており、キャンプでは火を焚いて盛り上がった。翌日は、そこから直登で「八方台」へ登ることになり、新人の私はすぐにバテていたらそれを見たら室賀さんが私の担いでいる

大型テントを代わりに担いでくださったのだ。それを見ていた藤井先生から『室賀先輩から担いでもらってよかつたな』と言われて、今でもそれを鮮明に覚えている。

6月になると、2回目の山行は「谷川岳マチガ沢」だった。初めてピッケルを持たせられ、雪溪の中央付近で雪上訓練となつて、あれは怖かった。すでにこの時も長岡ハイキングクラブ(NHC)の先輩たちがたくさん応援に参加されていて、雪溪下部にザイルを張って待機される。我々新人も滑落停止、グリセード、キックステップで訓練を重ね、最後には雪上での確保技術訓練。私は失敗して滑落した人の確保ができず、一緒に滑ってしまい、NHCの先輩に停めてもらったことを忘れない。

昭和46年12月28日から、初めての海外登山に連れて行ってもらった。ここでも室賀さん、藤井さんが隊長・副隊長で8名の登山隊だった。これが今に続いている韓国昌元山岳会との交流の始めである。

目的とした済州島の「漢拏山」は、登頂日にガスがかかっていて頂上の一角にたどり着いたものの、展望はゼロだった。その日のうちに下山して、さらに飛行機でプサンに戻ったときは、またもやヘトヘト状態、登山ガイドをしていただいた地の元登山家たちとの交流宴会まであったがどのよう時間が過ぎたか定かでない。

藤井さんと室賀さんはいつでも一心同体のごとく、行動が一緒だった。

翌年のパプアニューギニア国（この時はまだ独立していない）へも遠征した。7月29日からの遠征で、目標は最高峰の「ウイルヘルム山」4、511mだ。やはり、隊長が室賀さん、副隊長は藤井さんで15名の登山隊だった。標高3、800mのキャンプ地に幕営し、登頂予定日の朝、室賀さんが体調不良を訴えられてテントキーパーをすることになり、我々が地元民のガイドにより、無事に登頂して万歳をしているところに「空身の室賀さん」が登山ルートで

はないところからひよっこりと現れ、皆がびっくりしたことを覚えている。

藤井さんの号令で、改めて万歳をやった。

年号が変わり、平成4年11月16日には、中国・青海省登山協会との『兄弟友好協定』が長岡市商工会議所で締結された。この時から藤井さんは先頭になって友好登山行事を多数、実行されていた。5年後の平成9年には『新潟県山岳協会創立50周年記念事業・新潟県山岳協会と青海省登山協会の兄弟友好協定締結5周年事業』として、青海省にある『曲阿加吉瑪峰』（チアジャジマ峰）遠征計画を作り、県山協会長の立場で登山隊長も務められた。標高5、930mのこの山は未踏峰であった。ここはこれまでに歴史的にも未踏査の地域で、前年に岳友の小倉さんと調査にも入られたが完全ではなく、しかもこの時は天候不良などで主峰の初登頂はかなわなかった。しかし、7年後、第2次チアジャジマ峰登山隊により、平成16年7月31日に主峰

の初登頂に成功している。そして一昨年には、20周年を迎えたため、県山協の浅野隊長を頂点として青海省東崑崙山脈にある無名の未踏峰を目指すことになった。このころになると藤井さんの体調も思わしくなくなっていて、平成23年夏に私が単独で同地域の調査に出かけてきた。目標の山は、東崑崙山脈の盟主である『玉珠峰』（6、178m）の東隣にあって標高5、828m。無名峰である。初登頂ができたら命名権が与えられるとのことで、参加した13名の隊員は皆が張り切っていた。その結果、9月14日に2名登頂成功。17日にも別の2名が登頂成功という輝かしい戦果を収めることができた。

約束通りに、隊員相互で話し合った結果、山の名前を『玉珠西峰』として申請したが、ちょうどその時に日中両国の間に問題が起こり、決定通知がいまだに届いていない。

1月11日に他界された藤井さんがお元気ならば、我々はおしかりを受けていることだ

ろう。

『お前たちはなにをモタモタしているんだ。青海省へ飛んで行って話をつけろ！』と。

昨年7月27日に逝かれた室賀さんと藤井さんの間には『なにびとも入れない強い絆』があったと思える。しかし何も半年後に室賀さんの後を追うことまでしなくとも。

『藤井さん、またお会いしましょう。再見！』





魚沼の里

www.uonuma-no-sato.co.jp



魚沼の酒

www.hakkaisan.co.jp

ALways Security OK



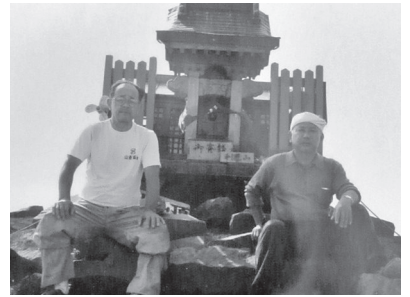
新潟総合警備保障(株)

〒950-8633 新潟市東区小金町1-17-20

TEL 025-274-1965 FAX 025-271-3445



在りし日の藤井さんと
想い出の写真



藤井先生また会う日まで

加藤記代子(むささび会)

新潟県山岳協会の行事には、いつもそこに室賀前新潟県山岳協会長と藤井前新潟県山岳協会長がおられた。それが当然のごとく「いつもお世話様です」「やー」とニツコリ笑顔がかえり安堵でき初対面は私がまだ二十代の国体の時であった。(むささび会)はまだそんなに知名度もなく知っていたけれどもなく、恐れ多く声もかけられなかった。

長い時を重ね国体選手として、また自然保護、冬山行事などにも参加させていただき学んだ。そのような時が過ぎ、指導員の話をいただき、受験したことが藤井前会長とのつながりを深くしていったように記憶している。沢登り実技試験であった。巻機山程度の沢は重ねていたのでヒョイヒョイと登った。藤井先生は「同じ条件なら低い所を選びなさい」と指導をいただいた。この指導により敬服し、尊敬が募り、近づいた。安全

をさらに意識するようになる。国体監督に任じられた時には肝に銘じ、登攀は選手と共に現在の阿部新潟県山岳協会長の指導を受け訓練に励んだ。藤井先生が新潟市に転居なさった時、夫と共に新居へお邪魔した。自慢の囲炉裏に炭の輝く茜色のぬくもりを浴びながら、酒の肴を調達したといひながら丹精を込め焼いてくださった。その肴の味のうまさは忘れることが出来ない。しかも、一杯酌み交わす山仲間の絆を受け幸せであった。話は尽きることなく進み、中国青海省登山協会との兄弟友好締結、長い年月の友好交流の苦労話から話題が深まり、囲炉裏の前に飾られている「書」に進んだ。中国の友人作と言われたように思われる。詩は読めなかったが、先生は奥様が詩吟をやっていたからわかると、読まれている目の奥に奥様を偲ぶ穏やかさをくむことが出来た。その「書」の作者は連綿が素晴ら

しく、かなわぬ望みをかけて今でも心に焼きついている。酸素の世話になられたときは、私が死の宣告を二回受けたことを知ってか、私と会うたびに「バケモノ」と言っていた。私は「気力と趣味の動と静を使い分け、病を頭からはずし、前向きに暮らしている」ことをさりげなく伝えた。この原稿を書きはじめて夜(三月四日)藤井先生からキスを受け嬉しく、その矢先、若い女性が藤井先生に寄り添い先生は喜び、はにかむ様子……その場面で目を覚めます。夢でも会ってくださった喜び。長岡人と考えていたが長岡弁はなく、笑うと目の下から頬がふっくらし顔全体に優しい笑みがほころぶ藤井先生が脳裏を霞める。多くの方々に尊敬され親しまれていたことを推察できます。いまどうなさっているのでしょうか。再び室賀前会長と共に登山でパーティを組み、山旅を楽しんでおられることと思えます。

また会う日まで。

藤井信さんを偲んで

新潟県山岳協会監事 諏訪 恵一(長岡ハイキングクラブ)

平成26年1月11日、新潟県山岳協会、そして、長岡ハイキングクラブは前年7月27日に亡くなられた室賀輝男さんに続いて、またまた、偉大な先輩を失うことになりました。

合わせにも丁寧に応じておられ、その際にもまったく資料を探すことなく話される様子から、すべてが頭の中に入っており、また、常に新しい情報に更新されておられる様子がうかがえました。

藤井さんの想い出を語るには、先輩諸兄のほうが親交も深く、人となりや業績を私などより多くご存じのことと思いますので、私が事務局長として藤井会長にお仕えした6年間でそれ以降のお付き合いの中でのエピソードを書き、哀悼の意を表させていただきます。

国体も藤井会長時代に、次々と競技種目が山岳競技から消えていくなか、将来的にクライミング1種目になることを念頭に、本格的クライミング施設建設に奔走されました。豊富な人脈を生かし、誰にも負けない施設建設への熱意で取り組まれたものの、その実現をみずに亡くなられたことは、無念でなりません。北信越国体の当番県になった際も、仮設のクライミングボードでの競技を余儀なくされ、本当に残念な思いでいっぱいだったことでしょう。

藤井さんといえば、すぐに中国と国体を連想するほど、中国とは結び付きも深く、青海省登山協会との交流の礎を築かれ、高校生を引率しての遠征にも多大な尽力をされておられます。書齋には他では手に入らなかったり、見たりすることすら難しい資料が山のようにあり、山岳関係のみならず、研究者からの問い

ご自身も今まで家族を犠牲にしてきたと仰っておられますが、10年ほど前、奥様が体調を崩されてからは、ご自分

日本ユース選手権2014 報告

副会長/ジュニア委員会 稲田 春男

も肺の病で苦しい中、炊事、洗濯、掃除を息を切らせながら、すべて一人でこなされてきました。そんな時でも、山屋だから、食事の支度や洗濯はお手のもので、苦にならないと笑顔で話されていたのが印象的でした。

今は、室賀さんにザイルで引き寄せられた彼の地で、奥様とのんびり過ごされていることと思います。

改めて、心からご冥福をお祈りいたします。

3月22、23日にかけて千葉県印西市松山下公園総合体育館で大会が開催された。

初日の22日に23日に行われる決勝に向け、予選のフラッシュング課題の2ルートに選手達が挑戦した。

まず、UBのカテゴリでは、全国大会初出場の小杉選手、栗田選手が参加。女子の部、栗田選手が1本目終了時点で上位に食い込み、決勝進出かと思われたが、2本総合の結果により、残念ながら決勝進出を逃した。小杉選手は全国大会初出場ながら、健闘した。栗田選手、小杉選手ともにクライミング歴1年程であり、今後の成長、そして活躍が期待される。

次に、ユースB男子のカテゴリへは、三宅選手、田中選手が参加。ユースBは全国的に選手層が厚く、上位に食い込むことが難しいカテゴリとなっている。上位選手の獲得高度が拮抗し、2課題を順位のポイントで合計した結果、

2選手ともに予選敗退となった。では、昨年のJOCにて初出場決勝進出した猪俣選手と、女子の部へ田中選手が参加。猪俣選手は、受験のため今大会に向けた練習時間を確保することが難しかったなか、1本目で上位となり、JOCに続き決勝進出が期待されたが、2本合計の結果、今回は決勝を逃すこととなった。田中選手はなかなか高度を稼ぐことができなかった。

最後に、ジュニアのカテゴリへは、南雲選手が参加した。南雲選手はユース選手権をはじめ、JOC、国体と全国大会へも数多く参加し活躍している。そして、その活躍により、新潟県選手全体のレベルアップへと貢献してきた選手でもある。今大会では、2課題ともいいところまで高度を稼いだが、残念ながら決勝へは進出とはならなかった。

現在、各カテゴリは2学年ごとに区分けされており、今回の参加選手は各カテゴリでの下学年での参加者が多かった。次年度は同じカテゴリへの参加でも上学年での参加となり、更なる活躍が期待される。そして、今大会のように各カテゴリへの参加選手を輩

平成25年第4回理事会議事概要

- ・日時 平成26年3月29日(土) 午前10時〜午後3時
- ・会場 長岡市中央公民館 405号室
- ・出席者 25名

1. 会長挨拶

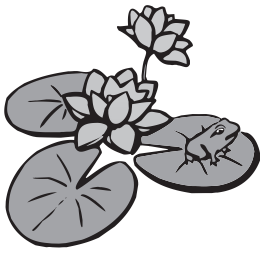
2. 議題

- 第1号議案 平成25年度専門委員会事業報告について
 - 第2号議案 平成25年度専門委員会決算報告について
 - 第3号議案 平成26年度専門委員会事業計画について
 - 第4号議案 平成26年度専門委員会事業予算について
- 後支部で協賛しているが新潟県山岳協会においても支援し、新潟県内で行われる山の大きなイベントでもあり、主催者側の意向を確認の上、27年以降で対応を検討することとした。

総務委員会

- ・指導技術委員会
- ・遭難対策委員会
- ・自然保護委員会
- ・競技委員会
- ・ジュニア委員会

- ・海外登山委員会
- ・会報編集委員会



第5号議案 平成25年度一般会計報告及び平成26年度予算案について

事務局長から資料により、25年度収支は、25年3月28日現在

24年度繰越金

1、852、727円

25年度収入額

2、289、472円

25年度支出額

2、183、755円

現在残高

1、958、444円

となっている。

その他、遭難対策積立金

7、514、531円

五十嵐基金

283、137円

を保有している。

26年度予算案は前年実績を基準として作成すると説明があり、承認された。

第6号議案 新規加盟団体について

新潟クライマーズクラブ(会員20名)から加盟申請あり。キャンプフォアの経営者が会長であり、営業と分離がなされること、会費の調達が確実になされることを確認の上、承認することとした。

第7号議案 自然保護委員会

委員の交替について

自然保護委員会委員長から委員の小林重弘氏(豊栄山岳会)から辞任の申し出あり。

井口光利氏(見附山岳会)に委嘱したいと提案があり承認された。

第8号議案 改正規約案の施行日について

4月19日の評議員会に上程する改正規約案の施行日を平成26年4月20日することが承認された。

3. 報告事項

森副会長から、「昨年、高体連が日山協に加盟したことにより、高体連加盟高校山岳部部員は選手登録(登録料1,000円)が必要となった。これを受けて、長野県山岳協会は長野県高体連へ26年度100千円(1人当り500円の補助金)の助成を行うこととした。また富山県山岳連盟においても1人当り500円の助成を行うこととした」との情勢報告があった。
4. 専門委員会監査
以上

室賀さん、藤井さんを

偲ぶ会が開催される

去る2月22日、長岡ハイキングクラブでは、昨年7月27日に室賀さんを送り、年が変わった1月11日にはまたもや、藤井さんを送る事になってしまった同会では深い悲しみのなか、長岡ホテルニューオータニに於いて両氏を偲ぶ会を開いた。県外、県内を問わず山岳界に多大な影響をあたえた両氏だけに、県外からも山岳関係に止まらず、各界の方々が室賀さん、藤井さんを偲び、哀悼を表わすために参集した。両氏のご遺族を始めとし、同会会員や縁のある長岡工業高等学校同窓会が中心となり、しめやかで荘厳だが、多くの思い出の話も披露され改めて室賀さん、藤井さんの存在の大きさを知る偲ぶ会となった。



室賀、藤井両氏を偲ぶ会にて

登山・スキー・テニスの専門店

ヒトと地球のインターフェイス



新潟市中央区堀之内南1丁目16-52 TEL(025)241-5134(仲) 営業時間/平日10:30am~8:00pm 休日10:30am~7:00pm

登山・ハイキング・クライミング
テレマーク&山スキー



パーマーク
長岡市西宮内2-97(長岡市役所裏通り)
TEL0258(37)1200-FAX0258(33)1164
●営業時間/AM10:30~PM8:00水曜定休

http://www.parrmark.co.jp

川内山塊 粟ヶ岳く堂ノ窪山く三方ガリ(C986)

新潟山岳会 大平 美紀

【日程】2014年2月12日

～15日(4日間)

【メンバー】永橋、大平

【はじめに】

2012年4月末、木六山から五剣谷BCで、わたしは矢筈岳の頂を踏むことができた。そこから見えた景色は、どこまでも山。またその時に見た、粟ヶ岳から青里までの美しい稜線を忘れられずにいた。

期の川内山塊に興味を持ち、幾度と雪に沢に川内を経験している今回のパートナーに恵まれ、幸運にもこうして一步を踏み出すことができた。

【概要】

2月12日(水) 晴れ
6・25 加茂水源地―7・18 大俣尾根取付―10・47 砥沢ヒュッテ―12・48 粟ヶ岳山頂―16・07 C1060付近(幕)

川内山塊の魅力を語るには、わたしの経験がまだ浅すぎる。深いゴルジュに深い藪、山ヒル、マダニ、鉄砲水、ガンガラシバナ。その美しさの反面の怖さが先に立って、なかなか川内に入れないのが現状だ。さて冬はどうか。厳冬期の矢筈岳は、わたしにどんな表情を見せるだろう。真綿に包まれた稜線は、わたしを迎え入れてくれるのだろうか。

怖さもあるが、同じく厳冬

歩き始めからスノーシュー装着。渡渉し、砥沢の堰堤を過ぎると大俣尾根に取付いた。最初は杉林の緩やかな道、その後は概ね急斜面の雑木帯で砥沢ヒュッテに出た。土日に使われたのであろう、数人分のトレースが残っており、楽に登らせていただけだ。砥沢ヒュッテで小休止、雪の状態良く最初のコブはトラパスした。山頂付近はガスで覆われており、核心の一つである一本岳に向かうため、晴れ間を待った。山頂からす



特異な雪庇、両側が切れ落ちた斜面を慎重に進む

ぐの下りで、距離としては20m程、両方から雪庇が形成され、両側が切れ落ちている箇所があった。ピッケルを出し、慎重に歩を進める。また一本岳は、雪崩を警戒しつつトラパスで抜けた。その後は、雪庇と急斜面で形成された痩せ尾根や、穏やかな天候が多かったこの冬の為に作られた、多数のシユルンドや固い雪の斜面に難渋しながらも、概ね計画通り堂ノ窪山手前のコルで幕とした。

2月13日(木) 吹雪
6・40 C1060付近―7・50 堂ノ窪山―12・10 C986付近(幕)
風の音で天気が悪いのが分かった。風速10m、視程10～20mといったところか。堂ノ窪からは支尾根が発達し、読図しながらの痩せ尾根歩きで神経を使う。冷たい風を頬に受けながら、概ね深雪、所々に要アイゼンとなる所が出て、足回りの脱着を繰り返した。無線交信が上手くいかず、明日の天気が分からない。このままの悪天が下山日まで続くことを想定し、無事に下山できる範囲まで進むことを止めた。12時過ぎ、三方ガリ下部で幕。青里にも遠く及ばず引き返すこととなった。川内山塊は本当に奥深いことを実感した。



一本岳手前鞍部より粟ヶ岳を振り返る

2月14日(金) 曇りのち吹雪
7・22 C986付近―15・40 粟ヶ岳山頂―16・45 砥沢ヒュッテ(泊)
夜を通して吹き続けた風の音がおさまっていた。目標とした「この先」が気になるが、スタート地点へ向け出発。昨日の雪のおかげで、アイゼンに換えたのは粟ヶ岳山頂下部だけで、他は概ね快適にスノーシューで歩けた。赤布を回収しながら、昨日見えなかった青里、矢筈を振り返りながら歩く。御神楽岳に飯豊連峰まで見渡せた。浅草岳、守門岳、白根山、烏帽子

山、知らない山の方が多く見える川内山塊、また来たいと思った。一本岳の近くに来た辺りから雪が降ってきて、そのトラパスを終えた頃から本格的な吹雪となった。前日の天候より厳しく、長く続きそうだと思った。なんとかヘッドランプを使わずに、砥沢ヒュッテまで辿り着くことができた。吹雪の音を聞きながら、平和な小屋で仲間達と交信を取った。
2月15日(土) 吹雪のち雪
8・30 砥沢ヒュッテ―10・52 加茂水源地
小屋の入り口(引き戸)が開けにくくなる程に、外は酷い吹雪であった。ゆつくりと

朝食をとり、十分に身支度をし、慎重に大俣尾根を下山した。標高が下がるにつれて風も弱まり、穏やかさが感じられるようになった。車には15センチほどの雪。下はそれ程荒れてはいなかったのだから。今回のパートナー永橋氏と握手をし、旅を終えた。

【終わりに】

今回の山行で川内山塊は、一筋縄では行かない手強い山域であることを改めて実感した。想像では、深雪ラッセルで体力勝負と思っていたが、ナイフリッジあり、硬雪あり、シールドありで、様々な雪の処理を要求された。停滞することもなく、この山域ならば天候の変化は、普通であったと思う。それでも青里に遠く及ばなかったのは、日数的に余裕がなかったと言えるだろう。

今回は軽量化のため、ツエルト泊、乾燥野菜の作成などの工夫を行った。どちらも概ね良好で、今後もこういった山行で活用していきたいと思う。

厳冬の矢筈岳への道、とにかくはじめの一步を踏み出す



ことができた。この挑戦が順調に進むとは思っていないが、また機会があればより具体的な形で、また新たな一步を踏み出してみたいと思っている。そして今年にはヒルに怖気づくことなく、川内の沢を体感してみたいと思っている。

参考文献：

「日本登山大系2南会津・越後の山」柏瀬祐之 岩崎元郎
小泉弘編、1997年、白水社
参考URL：
<http://www.tomanokaze.dojin.com/sokuhou/?p=5069>
<http://ivegotlife.jugem.jp/?eid=75>
<http://ivegotlife.jugem.jp/?eid=76>

寄贈図書の紹介

山なかま 長岡ハイキングクラブ 室賀輝男さん追悼誌

節目の折々に発刊される、山なかまが今回は室賀さんの追悼誌となってしまった。年が変わった途端涙の乾くまもなく、会の両輪と言われる藤井 信さんまでが逝かれてしまった。悲憤に暮れるなかでの追悼誌発刊となった。多くの山岳関係者や各界からの追悼の文、故人の業績など。故人の遺稿集などは私たちの知らない貴重な歴史として残して置きたい一冊となっていて、短期の間に纏められた編集された方々の苦勞がしのばれる。事業実績など貴重な文献も目をひく。編集、執筆に携わったスタッフの勞を讃えたい一冊となっている。

発行日 平成26年2月15日

発行者 本間宏之 長岡市関原町3丁目甲76 0258-46-2681

編集者 片桐一夫 杉本 敏 土田幸雄

B 5版 223頁



くちなし 新潟山岳会 創立50周年記念誌

多方面にわたる地域に繰り広げる、山行を気負わず、だが貴重な記録をいとも楽しそうに成し遂げる会員たちと会の運営をうらやましく感じる。会員たちの個性豊かさや明るくてのびのびとした行動とが、むしろ山の厳しさを際立たせている。美しく、豊富な写真もそれだけで楽しめる記念誌となっている。資料の収集、編集、執筆に携わったスタッフの勞を讃えたいボリュームのある一冊となっている。

発行日 平成25年2月9日

発行者 950-0812 新潟市東区1-11-20 阿部信一

編集長 渡辺康博 / 中村 脩 鈴木勝利 田沢紀子 西口達也

A 4版 225頁

